経営情報研究
第17巻第2号(2009), 35－43ページ

研究論文

中学生を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発(2)[1)2)]

― 中学生と大学生のコミュニケーション・スキルの比較 ―

牧　野　幸　志

A Development of the Communication Skills Training for Junior High School Students (2).

― The Differences of Communication Skills between Junior High School Students and University Students in Japan. ―

Koshi MAKINO

【要　約】本研究の最終目的は，現代の中学生を対象とするコミュニケーション・スキル訓練を開発し，実施することにより，不登校やいじめなどの問題が発生することを予防することである。そのために，一連研究の中の第2研究では，コミュニケーション・スキル(以下，CS と表記)尺度を使用して，現代の中学生の CS，精神的健康状態を現代青年(大学生)と比較する。被調査者は大阪府内の公立中学校に通う中学生 418 名(男子生徒 213 名，女子生徒 205 名)と大阪府内の私立大学・短大に通う大学生・短大生 147 名(男性 65 名，女性 82 名)であった。

CS の各因子得点に対して 1 要因 4 水準(中 1，中 2，中 3，大学生)の分散分析を行なった。その結果，自己表現，葛藤解決，関係構築のスキルは学年間でも，中学生と大学生との比較においても差がみられなかった。他方，友人の気持ちを読み取ったり，相手の立場になって考えたりなど状況を判断するスキルは，大学生のほうが中学 1 年生，3 年生より優れていた。これは非常に高度な技術のため，成長するにつれて身につけたと考えられる。しかし，会話スキルは，中学 2 年生のほうが大学生よりも優れていた。また，精神的健康状態は，中学 1 年生，中学 2 年生のほうが中学 3 年生，大学生よりも良かった。

キーワード：コミュニケーション・スキル，精神的健康，中学生，大学生.

---

1) 本研究は，平成20-23年度科学研究費補助金若手研究(B)（課題番号20730460，研究代表者牧野幸志)の助成を受けて行なわれた。
2) 本研究の一部は，日本心理臨床学会第28回大会，日本心理学会第73回大会で発表された。

1. 問　題

1.1. コミュニケーション・スキルの重要性

近年，心理学の分野においても，コミュニケーション・スキルの重要性が指摘されている(大坊，2006；藤本・大坊，2007)。本研究では，コミュニケーション・スキルを「日常生活において対人関係を円滑にするために必要かつ適切な直接的技術とその知識」と定義して研究を進める。大坊(2006)は，ソーシャル・スキルを「対人関係を円滑に運営する適応能力」とし，その中でも最も重要な面を「コミュニケーション力」としている。コミュニケーション力とは「自分のメッセージを適切に表出し，他者のメッセージを的確に把握できる力」である。藤本・大坊(2007)は，コミュニケーション・スキルを他の概念と比較して整理した。藤本・大坊(2007)は，スキルという多義的な概念を3階層からなる逆三角形モデルによって3つに分類した。最も外側の大きな概念は，文化・社会への適応において必要な能力であるストラテジー，次に大きな概念が対人関係に主眼がおかれた社会性にかかわる能力であるソーシャル・スキル，そして，最後が言語・非言語による直接的コミュニケーションを適切に行う能力であるコミュニケーション・スキルである。さらに，このコミュニケーション・スキルを6種類のスキルからなる複合概念としている。その6つとは，基本スキルの自己統制，表現力，解読力と対人スキルの自己主張，他者受容，関係調整である。この中でも特に対人スキルの3つが実際のコミュニケーション行動に影響を与えることを見出している。さらに，飯田(2003)は中学生が学校生活を送る上で必要なスキルを学校生活スキルとし，その中でも特に同輩とのコミュニケーション・スキルの重要性を指摘している。

このように，現代社会における人間関係において，他者とコミュニケーションを行なうためのスキルは非常と重要になっている。このコミュニケーション・スキルは，社会人のみならず，大学生，高校生，小中学生にまで幅広く求められている。したがって，このスキルが欠如している個人に対してコミュニケーション・スキルを獲得させようとする訓練を開発することは，社会的にも非常に価値のあることと考えられる。また，訓練の開発は，教育現場に対しても効果的な援助・介入となるであろう。

1.2. 中学生のコミュニケーション・スキルに関する先行研究

日本においては，依然として多くの中学校でいじめや不登校が大きな問題となっている。中学校の生徒たちが学校になじめなかったり，友人と仲良くなれない原因の1つとしてコミュニケーション・スキルの不足が挙げられる。周りの友人とうまくコミュニケーションがとれないことによりいじめの対象となったり，コミュニケーションが取りにくいために，クラスに溶け込めず，不登校となる場合も少なくない。

このような状況に対して，心理的の分野では，さまざまなアプローチが行われてきた。飯田・石隈(2002)は，中学生が学校生活を送る上で出会う発達課題・教育課題の解決を促進するスキルを「学校生活スキル」とし，その尺度を作成している。因子分析の結果，学校生活スキルは，自己学習スキル，進路決定スキル，集団活動スキル，健康維持スキル，同輩とのコミュニケーションスキルの5つの下位尺度から構成されていることが示された。その後，飯田(2003)は，

中学生における学校生活スキルと学校生活満足度との関連を調べている。その結果，学校生活スキルが特定の形で学校生活満足度に影響を与えていた。学校生活満足群は，学校生活スキルの 5 つすべてが平均より高く，特に同輩とのコミュニケーションスキルが顕著に高い傾向を有していた。逆に，学校生活不満足群は 5 つのスキルがいずれも平均よりも低く，特に同輩とのコミュニケーションスキルが顕著に低い傾向がみられた。この結果から，中学生にとって同輩(友人)とのコミュニケーションが非常に重要であることがわかる。

また，牧野(2009)は，中学生を対象としたコミュニケーション･スキル訓練の開発を進めている。牧野(2009)は，まず，中学生用のコミュニケーション・スキル尺度を作成した。コミュニケーション･スキルに関する項目に対する因子分析の結果，自己表現スキル，状況判断スキル，会話スキル，葛藤解決スキル，関係構築スキルの 5 因子を見出した。これらのスキルは，中学生が学校生活において，主に友人と円滑にコミュニケーションを行うために必要なスキルであった。さらに，この尺度を使用して現代の中学生のコミュニケーション･スキルが性別，学年によって異なるかを調査した。各コミュニケーション・スキル因子に対して性別(男性，女性)×学年(1 年生，2 年生，3 年生)の 2 要因分散分析を行なった。その結果，状況判断スキルは，女子生徒のほうが男子生徒よりも高く，特に中学 3 年において差が顕著であった。関係修復などの葛藤解決スキルは男子生徒のほうが高かった。中学生において，学年，性別によりコミュニケーション・スキルの高さが異なることが明らかとなった。

1.3. 先行研究の問題点と本研究の目的

牧野(2009)において，中学生が必要とするコミュニケーション･スキルの詳細が調査され，性別や学年により各スキルの高低が異なることが明らかとなった。しかしながら，中学生のコミュニケーション･スキルが成人のコミュニケーション･スキルと異なるのかということについては検討されていない。中学生のコミュニケーション・スキルと成人のコミュニケーション・スキルは異なるのであろうか，異なるとすれば，どのようなスキルが異なるのであろうか。また，牧野(2009)では，現代の中学生の精神的健康状態についても検討した。その結果，体がだるいなどの身体的症状は，中学 1 年生と 3 年生では女子生徒のほうが男子生徒よりも悪く，中学 2 年生では男子生徒のほうが女子生徒よりも悪かった。不安と不眠，社会的活動障害，そして，うつ傾向は，女子生徒のほうが男子生徒よりも高かった。概して，中学生においては，女子生徒のほうが男子生徒に比べ，精神的健康状態が悪く，学年が進むにつれて状態が悪くなっていた。しかしながら，この精神的健康状態も成人と比べて高いのか低いのかは明らかではない。中学生のときに精神的健康状態が悪く，その後，改善されていくのか，あるいは，中学生から成人となるにつれてより悪くなるのかについても検討する必要があるだろう。

この研究の最終目的は，現代の中学生を対象とするコミュニケーション･スキル訓練を開発し，実施することにより，不登校やいじめなどの問題が発生することを予防することである。この目的を達成するためにいくつかの研究を継続して進める。第 2 研究である本研究の第 1 の目的は，現代中学生のコミュニケーション・スキルを成人と比較することである。成人の中でも，中学生と同じく学校生活を送っている大学生を比較の対象とする。中学生のコミュニケーショ

ン・スキルと大学生のコミュニケーション・スキルには違いが見られるのか？見られるとすればどのような点が異なるのかを検討する。第2に，現代の中学生の精神的健康状態を成人と比較検討することを目的とする。中学生は大学生と比べて精神的に健康であるかについて調査する。もし異なるとすればどのような点が異なるのかを明らかにしていく。補助的に，ソーシャル・サポートについても，中学生と大学生を比較する。

2. 方　法

2.1. 調査手続きと被調査者

2008年(平成20年)10月，11月に大阪府内の公立中学校と府内私立大学，短期大学で集合調査を行なった。調査は「日常生活に関するアンケート」という形で，担任教員，担当教員の指示により無記名式で行なわれた。調査に要した時間は配布，回収を含めて約15分間であった。

被調査者　被調査者は大阪府内の公立中学校に通う中学生418名(1年生137名，2年生139名，3年生142名)と大阪府内の私立大学・短大に通う大学生・短大生147名(男性65名，女性82名)であった。男女の内訳などの詳細はTable 1参照のこと。ただし，欠損値があるため分析により人数が異なる。

2.2. 質問紙の構成

フェイスシート　回答の仕方の例を示した後，学校名，学年，組，性別，年齢を尋ねた。**コミュニケーション・スキル尺度(CS尺度)**　牧野(2009)で使用したCS尺度(20項目，5因子構造)への回答を求めた。回答は，「まったくあてはまらない」～「よくあてはまる」の4段階評定で得点が高いほどコミュニケーション・スキルが高いことを示す。**精神的健康状態**　中川・大坊(1985)によるGHQ精神健康調査票のGHQ28項目版4因子の各因子から4項目を選出した16項目，「まったくあてはまらない」～「よくあてはまる」の4段階評定，得点が高いほど精神的健康度が低いことを示す。**ソーシャル・サポート(SS)尺度**　全般的SSの利用可能性を測定する15項目(和田(1998)を参考にした)，「まったくあてはまらない」～「よくあてはまる」の4段階評定，15項目の平均値をSS得点とし，得点が高いほどSSが高いことを示す。

Table 1 被調査者の内訳

	男性	女性	合計	平均年齢
中学1年生	64	73	137	12.58
中学2年生	75	64	139	13.59
中学3年生	74	68	142	14.59
大学生	65	82	147	19.73
合計	278	287	565	
			(人)	(歳)

3. 結　果

3.1. コミュニケーション・スキルの学年差と大学生との比較

コミュニケーション・スキルの各因子に学年差，大学生との差がみられるかを検討した。分析は，学年(中学 1 年生，中学 2 年生，中学 3 年生，大学生)の 1 要因 4 水準の分散分析で行なった。従属変数は，コミュニケーション・スキルの 5 つの因子得点であった。

自己表現スキル　自己表現スキル得点に対して，分散分析を行なった(Table 2 参照)。その結果，条件差はみられなかった(F (3, 548)=1.20, *n.s.*)。全体の平均値は 2.80(以下，得点範囲 1～4 点)であった。

状況判断スキル　状況判断スキル得点に対して，分散分析を行なった(Table 2 参照)。その結果，条件差が有意であった(F(3, 545)=5.93, p<.01)。多重比較の結果，状況判断スキルは，大学生(M =3.23)のほうが中学 1 年生(M =3.00)，中学 3 年生(M =3.06)よりも高かった。中学 2 年生との間に差はみられなかった。

会話スキル　会話スキル得点に対して，分散分析を行なった(Table 2 参照)。その結果，条件差が有意であった(F (3, 557)=3.64, p <.05)。多重比較の結果，会話スキルは，中学 2 年生(M =3.12)のほうが大学生(M =2.85)よりも高かった。

葛藤解決スキル　葛藤解決スキル得点に対して，分散分析を行なった(Table 2 参照)。その結果，条件差はみられなかった(F (3, 558)=1.33, *n.s.*)。全体の平均値は 2.59 であった。

関係構築スキル　関係構築スキル得点に対して，分散分析を行なった(Table 2 参照)。その結果，条件差はみられなかった(F (3, 559)=1.15, *n.s.*)。全体の平均値は 2.55 であった。

Table 2　コミュニケーション・スキルの学年差と大学生との比較

学年，大学生 CS 尺度	中学生			大学生
	1 年生	2 年生	3 年生	
自己表現スキル	2.74 (0.63)	2.83 (0.60)	2.77 (0.67)	2.87 (0.59)
状況判断スキル	3.00 (0.47)	3.11 (0.46)	3.06 (0.57)	3.23 (0.43)
会話スキル	3.00 (0.73)	3.12 (0.64)	3.02 (0.71)	2.85 (0.67)
葛藤解決スキル	2.55 (0.67)	2.63 (0.56)	2.65 (0.64)	2.53 (0.60)
関係構築スキル	2.54 (0.81)	2.65 (0.73)	2.52 (0.83)	2.47 (0.79)

評定値は，1～4 点の得点を取りうる。( )内は標準偏差

3.2. 精神的健康の学年差と大学生との比較

精神的健康状態の各因子が学年により異なるか，大学生との間で差がみられるかを検討した。分析は，学年(中学1年生，中学2年生，中学3年生，大学生)の1要因4水準の分散分析で行なった。従属変数は，精神的健康状態の4つの因子得点であった。

身体的症状　身体的症状(体がだるいなど)の因子得点に対して，分散分析を行なった(Table 3 参照)。その結果，条件差はみられなかった(F (3, 553)=1.76, $n.s.$)。全体の平均値は2.32であった。

不安と不眠　不安と不眠(いらいらするなど)の因子得点に対して，分散分析を行なった(Table 3 参照)。その結果，条件差はみられなかった(F (3, 549)=1.12, $n.s.$)。全体の平均値は2.04であった。

社会的活動障害　社会的活動障害(ひとつのことに集中することができないなど)の因子得点に対して，分散分析を行なった(Table 3 参照)。その結果，条件差が有意であった(F (3, 543)=3.00, p <.05)。多重比較の結果，大学生(M =2.24)，中学3年生(M =2.26)のほうが中学1年生(M =2.07)，中学2年生(M =2.04)よりも社会的活動障害が高かった。

うつ傾向　うつ傾向(心が暗いなど)の因子得点に対して，分散分析を行なった(Table 3 参照)。その結果，条件差が有意であった(F (3, 548)=10.21, p<.01)。多重比較の結果，大学生(M=2.11)のほうが中学1年生(M=1.58)，中学2年生(M=1.74)，中学3年生(M=1.73)よりもうつ傾向が高かった。

Table 3　精神的健康の学年差と大学生との比較

学年，大学生 精神的健康度	中学生			大学生
	1年生	2年生	3年生	
身体的症状	2.19 (0.78)	2.35 (0.79)	2.36 (0.76)	2.38 (0.68)
不安と不眠	2.08 (0.94)	2.11 (0.88)	2.03 (0.87)	1.94 (0.70)
社会的活動障害	2.07 (0.75)	2.04 (0.71)	2.26 (0.83)	2.24 (0.77)
うつ傾向	1.58 (0.81)	1.74 (0.80)	1.73 (0.84)	2.11 (0.92)

評定値は，1～4点の得点を取りうる。( )内は標準偏差

3.3. ソーシャル・サポートの学年差と大学生との比較

ソーシャル･サポート得点について学年差，大学生との差がみられるかを検討した。SS 得点に対して 1 要因 4 水準(中学 1 年生，中学 2 年生，中学 3 年生，大学生)の分散分析を行なった。その結果，条件差はみられなかった(F(3, 542)=1.94, $n.s.$)。全体の平均値は 3.29 であった。

Table 4　ソーシャル・サポートの学年差と大学生との比較

学年，大学生 SS	中学生			大学生
	1 年生	2 年生	3 年生	
SS 得点	3.25 (0.66)	3.31 (0.55)	3.20 (0.71)	3.37 (0.57)

評定値は，1～4 点の得点を取りうる。( )内は標準偏差

4. 考　察

本研究の第 1 の目的は，現代中学生のコミュニケーション・スキルを大学生と比較することであった。そして，第 2 の目的は，現代の中学生の精神的健康状態を大学生と比較検討することであった。

4.1. コミュニケーション・スキルの学年差と大学生との比較

コミュニケーション･スキルの各因子により学年差，大学生との差がみられるかを検討した。その結果，自己表現，葛藤解決，関係構築のスキルは学年間でも，中学生と大学生との比較においても差がみられなかった。自己表現スキルについては，全体の平均値が高く(M =2.80，得点範囲 1～4 点)，中学生になるまでに比較的発達が既に進んでおり，身についていると考えられる。しかしながら，葛藤解決スキルと関係構築スキルについては，それほど高くなく(いずれも 2.5 点台)，中学生でもスキルが身についておらず，大学生になってもまだ身についていないといえるだろう。初対面の人と関係を作っていく技術，友人などともめごとが起こったときにそれを解決する技術については，青年期後期になっても難しいことを示している。

他方，友人の気持ちを読み取ったり，相手の立場になって考えたりなど状況を判断するスキルは，大学生のほうが中学 1 年生，中学 3 年生より優れていた。これは非常に高度な技術のため，大学生においては，成長するにつれて身についたと考えられる。会話スキルは，中学 2 年生のほうが大学生よりも優れていた。これは，おそらく，大学生は大学生活での新たな友人との会話に困難さを感じている現状(被調査者のほとんどが大学 1 年生)と中学 2 年生は，中学校生活にも慣れてきて，受験のプレッシャーのない学年のため，クラスの友人との会話を楽しんでいるという現状を反映したものと推測される。

4.2. 精神的健康の学年差と大学生との比較

現代の中学生の精神的健康状態が学年により異なるか，大学生との間で差がみられるかを検討した。その結果，体がだるいなどの身体的症状と不安と不眠については，中学生の学年間，大学生との比較においても差はみられなかった。他方，集中できないなどの社会的活動障害については，大学生と中学3年生が中学1年生，中学2年生よりも高かった。これは，調査実施時期が10月後半だったために，中学3年生は受験を控えており，勉強に集中できないなどの社会的活動障害が高かったと考えられる。また，青年期後期の大学生においても精神的に不安な状況が報告されている。そのため，大学生の社会的活動障害が高かったと考えられる。さらに，うつ傾向は，大学生がすべての学年の中学生よりも高かった。これは，大学生がこの時期に友人関係，恋愛関係，自分の将来への不安などの多くの悩みを抱えるためと考えられる。中学時にはなかった新たな悩みが大学生には現れている結果であろう。最後に，中学生のソーシャル・サポートと大学生のソーシャル・サポートを比較した結果，差はみられなかった。中学生も大学生も周りの友人からのサポートを受けていることが明らかとなった。

4.3. 本研究の問題点と今後の課題

本研究の問題点と今後の課題について述べる。本研究の問題点は，コミュニケーション・スキル尺度の項目の精度である。本研究では被験者である中学生の負担を考え，質問項目数を出来るだけ少なく設定した。そのため，関係構築スキル因子においては項目数が2項目となってしまった。抽出した5因子の精度を高めるためにも，さらにいくつかの項目を追加して調査を続ける必要があるだろう。

最後に，今後の課題をあげておく。本研究で作成したコミュニケーション・スキル尺度の中の5つのスキルに対応したコミュニケーション・スキル訓練のプログラムを計画し，実施しなければならない。まず，各因子の概念から，そのスキルを高めるような訓練プログラムを作っていく。具体的には，中学生が参加できるような活動やゲームを考え，その訓練を指導できる指導者やリーダーを育成していく必要があるだろう。その後，実際に中学校に出向き，コミュニケーション・スキル訓練を週に1回程度の割合で実施する予定である。

引 用 文 献

大坊郁夫 (2006) コミュニケーション・スキルの重要性 日本労働研究雑誌，546，13-22.

藤本 学・大坊郁夫 (2007) コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究，15，347-361.

飯田順子 (2003) 中学生における学校生活スキルと学校生活満足度との関連 学校心理学研究，3，3-9.

飯田順子・石隈利紀 (2002) 中学生の学校生活スキルに関する研究―学校生活スキル尺度(中学生版)の開発― 教育心理学研究，50，225-236.

牧野幸志 (2009) 中学生を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発(1)―中学生の

コミュニケーション･スキル, 精神的健康の性差, 学年差の検討―　経営情報研究, 17(1), 1-16.
中川泰彬・大坊郁夫　(1985)　日本語版 GHQ 精神健康調査票手引き　日本文化科学社
和田　実　(1998)　大学生のストレスへの対処, およびストレス, ソーシャルサポートと精神的健康との関係―性差の検討　実験社会心理学研究, 38, 193-201.